

体育館の屋上近くに設置された太陽熱給湯のパネル



## エコ・キャンパス 生きた教材



ペットボトルのラベルをはがして別々に捨てる学生＝いずれも横浜市都筑区

### 東京都市大「ごみ分別徹底・雨水利用」…ISO取得

横浜市都筑区にある東京都市大（旧武蔵工業大学）環境情報学部（学生数2022人）には、ソーラーシステムや雨水利用など環境保全の工夫が様々な施設に施されている。この「エコ・キャンパス」自体が生きた教材となっている。

1998年に、環境に配慮した活動の国際標準規格「ISO14001」の認証を大学として初めて取得した。キャンパス内で行われるごみの堆肥化を進め、再生紙利用率も大きく引き上げた。不在時のトイレや研究室の消灯も徹底。

1人当たりの1年間の資源使用量を98年度と09年度で比べると、水は9・2立方メートルから5・2立方メートルに、電力は2547キロワット時から1498キロワット時に、大幅な削減を達成した。

学生でつくるISO委員会では現在25人が活動する。学内に置かれた7分別のごみ箱など次々に提案を実現してきた。同委員会代表の出井健一君（3年）は「6月にゴミ箱の前で分別指導をしたら翌月の混在率が2割下がった。地道な活動を続けることの大切さがありました」と話す。

蓄熱式ヒートポンプなどの最新設備も数多く備えているが、同学部の宿谷昌則教授は「断熱材やペアガラス、ひさしを合理的に設置し、冬は自然光を採り入れることで得られる省エネ効果の方が実はずっと大きい」と話す。実際、校内は空調がゆるめでも快適に過ごせると学生にも好評だ。ごみの分別を徹底したことで、最新鋭の焼却炉も休眠状態になった。ハードよりもソフトを重視した快適な校舎で、環境を意識して過ごすことで学生も自然に「エコ」の大切さを学んでいくという。

地域との連携も重視し、市の河川浄化活動への協力なども進めてきた。キャンパス内にある約1・8haの保全林では地域住民にも呼びかけて、学生らが下草刈りや竹の間引きを行う。春には一緒にタケノコ掘りをしてにぎわう。

増井忠幸学部長は「ISOは研究・教育をはじめとする活動の軸になっている。学生が主体性を持って目標を決め、達成することで学べる効果も大きい」と話している。